

なほぬめりを洗ひ、しづくをたらして、鹽二合、
 糀二合、古酒二合柚の葉少し入て、かき交せて、器へ
 入おきて一週間はこへてつかふべし。

それおばけがくるぞ

ひ さ 子

それおばけがくるぞ。そんなに無理を言ふと、

おばけがきて食てしまふよ。

春チャンや。いつ中でもおしやべりをするよ、

おばけがくるから、れとなしくして、早くお寝

なさいよ。

花子や。一寸こゝにきてごらん。あの暗い處に、

おばけが見えますよ。

なぞいふことは、阿母さんなんかの口から、

よくできることばでございます。ある人が、日本の

家庭は妖怪の製造所である。といはれましたの
 も、あながち無理ではありません。そうして、
 かやうにひきあひに出されるおばけは、大抵やう
 いふ場合につかはれるか、と申しますと、

一、子どもがいふことをきかぬ時に、おばけを
 もち出し、こわがらせて従順ならしめやう
 とすること。

二、自分の意に従はすために、はじめからおば
 けでおどしてかゝること。

三、深いわけはなく、からかい半分におどして
 見て、子どもが、キヤツ〜とこわがつた
 り、目をまろくして居るのを見て、おもし
 ろがること。

まづ右のやうな場合が多いであらう。と思ひま
 す。

三のやうな場合が澤山ありますと、子どもはな
れてしまつて、こわくも何ともないやうになり、
おどす人もおどされる子ども、おもしろくなくなり
ませう。又一や二の場合にしても、あまり幾度も
かさなりますと、子どもは、おばけでおどされな
ければ、いふことをきかぬかあるひは、おどされ
てもきかぬやうになりませう。

さて、そのおばけといふものが、實際世の中に
ありまして、眞におそるべきものであるならば、
まだしもでありますが、勿論ないもので、従てお
そるべきものではありません。只昔の迷信時代の
おなごりとして、人々の心や、書物や、話に、残
つて居るだけのことであります。そうすると、大
切な子どもを、教育する爲に、こんなつまらない
ものをひきあひに出すのは、愚かな話ではありませ

んか。たとひ大きくなつてから、おばけといふも
のではないのである。といふことを知る時代が来る
にもせよ。それを知るまでに、多くの年月がかゝ
り、徒に心力を費すことを思へば、ほんとうに害
あつて益のない話であります。殊におばけの話
や、おどすことが、小心、臆病、卑怯、迷信など
の基になることを思へば、なほさら、日本の家庭
から、おばけといふことを、遂ひ出してしまはな
ければなりません。

つまり子どもにおそれさせてよいものは、決し
て、おばけや、天狗や、狐や、狸の類ではありま
せん、道理上眞におそるべき事物を、おそれさせ
るが正しいのであります。

郭公なく聲きけば別れにし

故郷さへぞ戀しかりける